

ディケンズ・フェロウシップ日本支部 THE JAPAN BRANCH OF THE DICKENS FELLOWSHIP

令和7年度春季総会プログラム SPRING CONFERENCE 2025 PROGRAMME

日時：2025年6月14日（土）
Date: 14 June 2025 (Sat)

会場：ノートルダム清心女子大学
（〒700-8516 岡山県岡山市北区伊福町 2-16-9）

Venue: Notre Dame Seishin University
(2-16-9 Ifuku-cho, Kita-ku, Okayama City)



Michael John Goodman, Charles Dickens Illustrated Gallery, www.CharlesDickensIllustration.org

総会会場 General Meeting room: ヨゼフホール 2300JB
理事会会場 Board of Trustees Meeting room: ヨゼフホール 2303JB

11:00 理事会 Board of Trustees Meeting

13:30 開会 Opening Address

松本靖彦（ディケンズ・フェロウシップ日本支部長）
Yasuhiko Matsumoto (President, The Japan Branch of the Dickens Fellowship)

13:35 総会 General Meeting

14:00 – 14:45

研究発表 Short Paper Session

司会：小宮彩加（明治大学） Ayaka Komiya (Meiji University)

発表者：宮丸裕二（中央大学） Yuji Miyamaru (Chuo University)

「他人になぞらえられる自己像 – 『デイヴィッド・コパフィールド』の中に現れるベンジャミン・フランクリン」
'The Self-Image Shaped through Comparison to an Exemplar: Benjamin Franklin in *David Copperfield*'

15:00 – 17:00

シンポジウム Symposium

「埋める、憑く、語る – 怖〜いディケンズ」
'Burying, Haunting, and Narrating: Scary Dickens'

司会：橋野朋子（関西外国語大学） Tomoko Hashino (Kansai Gaidai University)

講師：熊谷めぐみ（明治大学・非） Megumi Kumagai (Meiji University・part-time)

「介入する傍観者–ディケンズの怪奇小説に見る語り手の特異性」
'Intervening Observer: Unusual Narrator in Dickens's Ghost Stories'

講師：筒井瑞貴（早稲田大学） Mizuki Tsutsui (Waseda University)
「ディケンズと生き埋め」 **'Dickens and Premature Burial'**

17:30

閉会の辞 Closing Address

宮丸裕二（中央大学） Yuji Miyamaru (Chuo University)

17:30 懇親会 Convivial Party

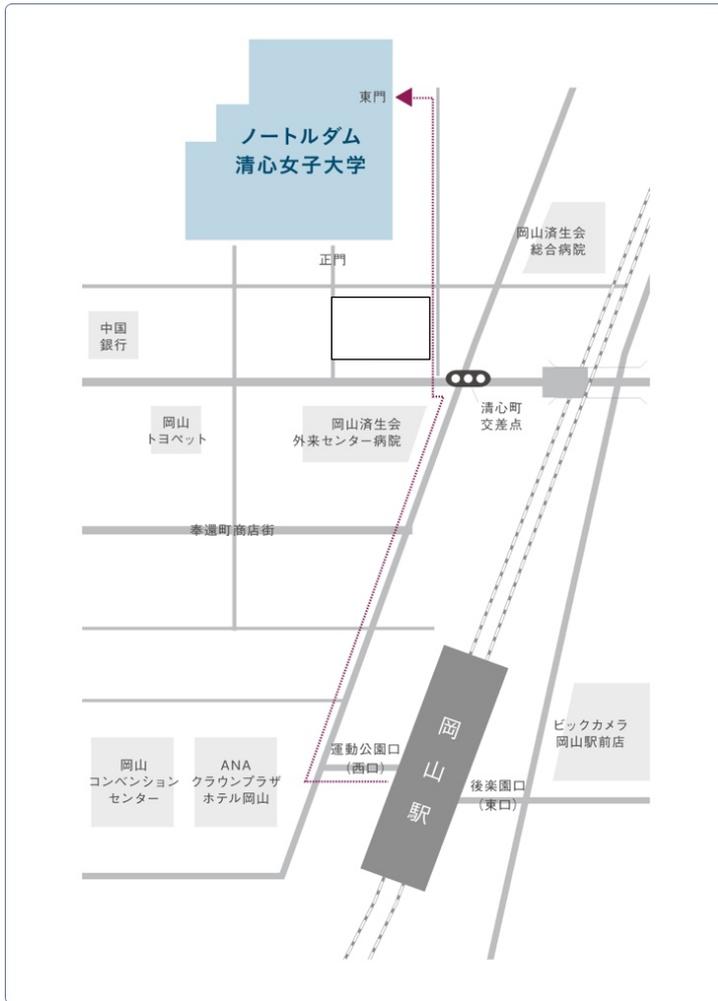
会場: カリタスホール

(参加者の人数によって近くのお店に変更の可能性があります。その場合、会費は5,500円となりますことをご了承ください。)

会費：一般 5000 円、学生 3000 円

アクセスマップ

<https://www.ndsu.ac.jp/about/access.html>



岡山駅から大学までの道筋

* 岡山駅から大学までは徒歩で 10 分余りです。駅の西口にタクシー乗り場があるので、タクシーで来ていただくことも可能です。

* 大学の手前の清心町交差点には陸橋はありませんが、道路の東側から西側に渡る横断歩道がありません。交差点を北に渡る横断歩道は道路の西側にあるので、奉還町商店街の入り口までいくつかある横断歩道を渡って、道路の西側を歩いて来ることをお勧めします。

JR 岡山駅までの所要時間

- 四国方面から
 - 在来線 高松駅から「マリンライナー」で約 55 分 高知駅から「特急南風」で約 2 時間 30 分 松山駅から「特急しおかぜ」で約 2 時間 35 分
- 山陰方面から
 - 在来線 米子駅から「特急やくも」で約 2 時間 松江駅から「特急やくも」で約 2 時間 30 分
- 京阪神方面から

■ 在来線 姫路駅から約 1 時間 20 分 ■ 新幹線 姫路駅から約 15 分 新神戸駅から約 30 分

- 山口・広島方面から

■ 在来線 福山駅から約 50 分 ■ 新幹線 広島駅から約 35 分 新下関駅から約 1 時間 20 分

- 九州方面から

■ 新幹線 小倉駅から約 1 時間 20 分 博多駅から約 1 時間 45 分 熊本駅から約 2 時間 30 分

- 岡山空港から

■ リムジンバス 約 30 分 【JR 岡山駅 運動公園口（西口）着】

- 山陽自動車道岡山 I.C から

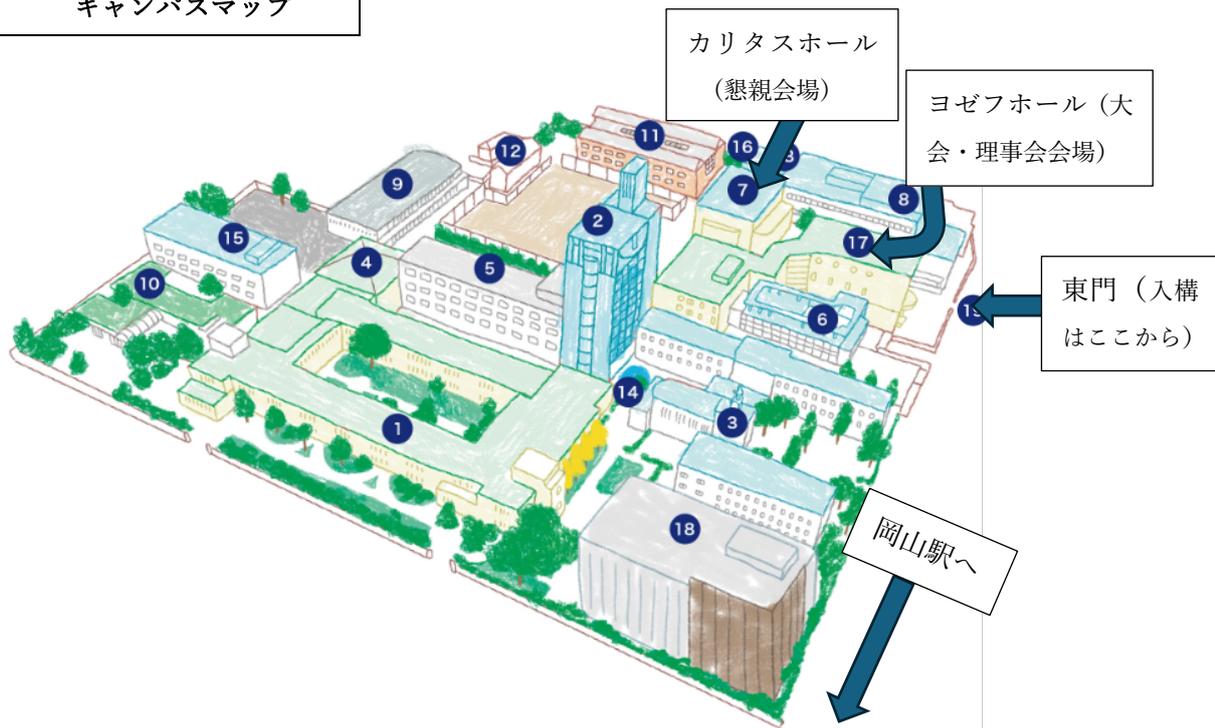
■ リムジンバス 国道 53 号線：約 10 分

* 大学 HP に岡山駅から大学までのアクセス動画がありますので（上の地図のルートとは異なりますが）、ご参照ください。

https://www.ndsu.ac.jp/admission/university/open_campus/

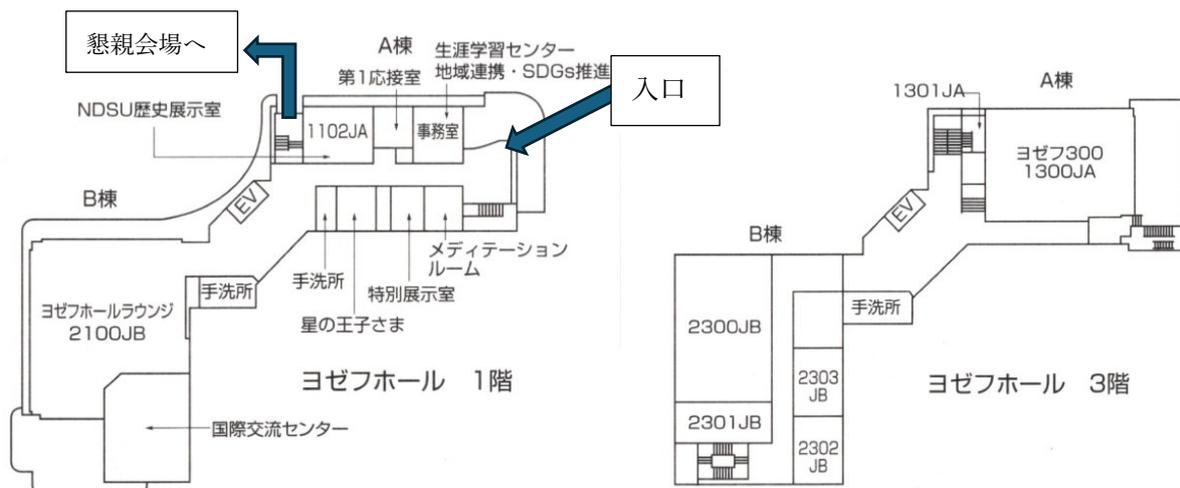
ノートルダム清心女子大学
キャンパスマップ

https://www.ndsu.ac.jp/life/campus_map.html



- * 学内の食堂や店舗は当日閉鎖されているので、昼食は駅ビル、または大学までの道筋にあるコンビニで購入するか、駅や大学近くの食堂等で済ませてください。
- * 会場の教室で食事をとっていただくことはできません。
- * お茶の用意はありません。学内には自動販売機がないので、飲み物は駅ビルのコンビニ等で購入して各自ご持参ください。

ヨゼフホール案内図



入口を入れて直進し、エレベーターで3階に上がってください

大会会場：2300JB
理事会会場：2303JB

研究発表

「他人になぞらえられる自己像－
『デイヴィッド・コパフィールド』の中に現れるベンジャミン・フランクリン」
‘The Self-Image Shaped through Comparison to an Exemplar:
Benjamin Franklin in *David Copperfield*’

宮丸裕二

『デイヴィッド・コパフィールド』の中にはベンジャミン・フランクリンへの直接的な言及を随所に見ることができると同時に、フランクリンの人物像に重なるかたちで自己像を提示することがあり、そればかりではなく、自分についての物語の語り方においてもフランクリンの手法を借用していることが分かる。フランクリンがその著書『自伝』の中に著した自己像が、ディケンズが本小説を執筆する際にどのように影響したのかを考えてみたい。そのことで、自分というものをどう描くかということに取り憑かれ、そのことばかりを模索していた時期のディケンズの内実の一部を明らかにすることを期したい。

シンポジウム

「埋める、憑く、語る－怖～いディケンズ」
Burying, Haunting, and Narrating: Scary Dickens

G. K. Chesterton は、*Charles Dickens: A Critical Study* (1906) において、ディケンズの作品には、“to make the flesh creep and to make the sides ache, were a sort of twins of his spirit” という、読み手を恐怖させ、笑わせるという二つの不可分の気質があることを指摘している。喜劇的な側面が取り上げられることが多いが、ディケンズは生涯にわたって怪奇や幻想に魅了された作家でもあった。このシンポジウムでは特に怪奇趣味が顕著に現れた作品に着目して、19世紀の社会に広く共有されていた生き埋めという現実的な恐怖から、幽霊物語における語り手の特異性まで、ディケンズ作品におけるゴシック的要素をさまざまな側面から検討したい。

介入する傍観者－ディケンズの怪奇小説に見る語り手の特異性
Intervening Observer: Unusual Narrator in Dickens's Ghost Stories

熊谷めぐみ

ディケンズの怪奇小説には、第三者的立場を貫いて傍観者として物語に立ち会う語り手がたびたび存在する。一見、部外者に見える彼らは、犠牲者たちと知らず知らずのうちに関係し、重要な介入者として物語の中で機能する。本発表では、ディケンズが編集長を務めた週刊雑誌 *All The Year Round* のクリスマス号に掲載された二つの短編小説「殺人裁判」 ("To be Taken with a Grain of Salt", 1865)、 「信号手」 ("The Signal Man", 1866) を中心に、ディケンズの怪奇小説における介入する傍観者としての語り手に着目し、その語り手の特異性を読み解いていく。

ディケンズと生き埋め

Dickens and Premature Burial

筒井瑞貴

ディケンズの作品には生きながらにして埋められる人間のモチーフが頻出するが、生き埋め恐怖症は 19 世紀のイギリス社会に膾炙していた。ディケンズが愛読していたとされる *Blackwood's Magazine* の恐怖物語の中でも、1821 年 10 月号に掲載された John Galt による短篇小説 "The Buried Alive" がこの主題を最も典型的な形で描き出しており、その影響は一見すると無関係な『クリスマス・キャロル』にも及んでいるように思われる。医学が発展途上であった当時のイギリスにおいて「生」と「死」の境は現代よりも遥かに曖昧なものであり、人々は自らの身体や生命が他者の手によって脅かされる不安を常に抱えていたといえる。本発表ではこうした背景を踏まえたうえで、特に『二都物語』においてこの恐怖がどのように投影されているかを検討したい。